

## ウクライナ侵攻と原発危機

坂田 尚之

2022年2月24日、キャタピラの音とともに21世紀にあり得ない事態が始まった。プーチン大統領の命令一下、ロシア軍がウクライナに侵攻を始めた。

1986年のチェルノブイリ原発事故も原因の一つとされるソ連（ソビエト社会主義共和国連邦）の崩壊後、ベラルーシとともに独立したウクライナは2014年にクリミア半島を軍事侵攻によりロシアに併合されており、その後もウクライナとロシアは緊張関係にあった。

2022年1月にウクライナ緊張の問題解決のために2年半ぶりに米とロシアの会談およびNATOの会合が開かれたときから今回の問題の表面化が始まったように見えるが、それにしても原発を攻撃するなんて考えられないことだ…。

### 「爆発なら欧州終わる」

「暗闇に砲弾の閃光が走った。4日、ロシア軍が攻撃したウクライナ南部のザポロジエ原発。…戦車が突き進んだ。「核テロだ。爆発が起きれば欧州は終わる」ゼレンスキー大統領が激昂した。」(3/5 上毛)

ロシア軍は、2/24 チェルノブイリ原発、3/4 ザポリージャ(ザポロジエ)原発を制圧。3/9 ロシア軍の軍事行動によりチェルノブイリ原発停電。その他にも核関連施設(物理技術研究所)を3/6、3/10と攻撃した。

原発は炉心を直撃されなければ大丈夫なわけではないことは東京電力福島第一原子力発電所事故で充分にわかっている。「**原発は核燃料を冷やすための取水装置や配管が打撃を受けただけでも事故が起きる**」(原子力資料情報室 松久保肇事務局長 3/5 上毛)。外部電源や配管が攻撃されればメルトダウンは起こるのである。もしザポリージャ原発が破壊されればその被害は甚大なものになるだろう。チェルノブイリ原発4号炉は100万kW、ザポリージャ原発は100万kWが6基の600万kWの規模であるが、ウクライナのクレバ外相は、ツイッターで「**もし爆発すれば、チェルノブイリ(原発事故)の10倍以上になる**」(3/5 毎日)と危機感をあらわにしたという。日本にはどんな影響があるのだろうか。

36年前のチェルノブイリ原発事故の時、1週間後の前橋では私のガイガーカウンターの測定値は通常の3倍の放射線量を示した。クレバ外相の言う通りであれば30倍を示すことになる。事故前は約0.04マイクロヘルム毎時(茨城での当時の平均値)なので1.2マイクロヘルム毎時となるが、除染の基準0.23マイクロヘルム毎時の5倍以上の汚染をこうむることになる。これは日本だけでなく、1万メートル上空のジェット気流に乗って放射性物質が世界中にまき散らされ、世界中が住めないほど汚染されることを意味する。

### 「砲撃の危険性知らず」

危険性は稼働中の原発だけではない。3/9 ロシア軍の軍事行動で停電したチェルノブイリ原発について、ウクライナのクレバ外相は「**原発は非常電源に切り替えたが、48時間しか電力が持たない…。電源が失われれば、使用済み核燃料が冷却できず、放射性物質が漏れだす恐れがある…**」(3/10 上毛)としてロシアに停戦を呼びかけた。実は、使用済みの核燃料は使用前より格段に放射能が強く、「**原子炉から取り出した直後の燃料棒の放射能は、使用前の1億倍**」(HP「よくわかる原子力」原子力教育を考える会 2008/10/28)とも言われている。これは一般に原子炉建屋内に保管されており、もちろんザポリージャ原発にも保管されている。

前橋出身の高木仁三郎氏が立ち上げた原子

力資料情報室は HP で「ザポリージャ原発は 6 基の原子炉と使用済み核燃料が存在する。総量は 2017 年時点で 2,204 トン、そのうち 855 トンがプール内に、1,349 トンが乾式貯蔵施設に保管されている。これらの冷却に支障が出れば、福島第一原発事故のような惨事にもなりかねない」(3/4)と述べている。

原発攻撃の危険性を知らないはずがないロシアがなぜ砲撃をしたのか。「ロシア軍は原発砲撃の危険性について全く知識がなかった」(3/23 上毛)とウクライナの原子力企業エネルギーエネルゴアトムのトップが証言したという。ロシアは原発も核兵器も持っているが、子どもたちに放射性物質の学習はなされていなかったのだろうか。

## 平和な電源か

このウクライナの惨状からしても、原発は使うべきではない、と考えざるを得ない。勝田忠広明治大教授は「核兵器とは桁違いの放射性物質を有する原発は戦争では『大きな爆弾のようなものだ』」(3/23 上毛)と言う。核兵器を使用せずとも砲弾、ミサイルなどの通常兵器で破壊

できるので攻撃対象になるのは当たり前だ。しかも、ロシアも批准しているジュネーブ条約第一追加議定書には第 56 条「危険な力を内蔵する工作物等(ダム、堤防、原子力発電所)の保護」(外務省 HP)があるのにも関わらず原発を攻撃した。これは”人間は簡単に約束を破る”、ということを実に示している。「原発は…存在そのものがリスク」(3/20 上毛)とまで大島堅一龍谷大教授は言い切る。原発は平和な電源ではないのである。

今回の事態で何よりも大切なことは“平和”であると改めて感じさせられたが、現状は斎藤幸平氏が『人新世の「資本論」』で言っている 4 つの未来の選択肢 (①気候ファシズム・②野蛮状態・③気候毛沢東主義・④脱成長コミュニティ) の内の、①と②が示す「気候ファシズム」の国家が乱立し、国連も機能を果たせず、今、世界は「野蛮状態」に陥りそうになっているように見える。しかし、私たちは明るい展望を失ってはいけないし、斎藤氏が語る戦争も気候危機も乗り切る展望を別の機会に私は書きたいと思う。



## — 「原発文庫」の本 — 貸し出しています。無料、返すのはいつでも OK

今回は、E(核開発)の分野からの紹介です。分野別については前回は参照

No.312

### 「渚にて 人類最後の日」

ネヴィル・シュート著 佐藤龍雄訳

創元 SF 文庫 2009 年 原書は 1957 年刊

原題「On The Beach」1959 年に映画化

小国の軍隊の爆撃をきっかけに憶測や間違いが重なり、第 3 次世界大戦が勃発した。戦いは短期間で終わったが、その間に 4700 発以上の核爆弾が投下された。放射性物質に汚染された北半球では、生物はすべて死滅した。戦争から 2 年近くが経過し、放射性物質は

徐々に南下し、オーストラリア最南端の都市メルボルン周辺にもやがて汚染が広がってくる。登場人物たちの最期の時に近づく日々と誰も避けられないその時を描いている。

プーチン大統領の核使用の脅迫と原発へのロシア軍の攻撃に、65 年前の SF 小説が現実味を帯びてきているようで重く感じた。

(田村ゆう子)

